

第2回 四国生物多様性会議 高知グループワーキングレポート

c. 「里地里山」 レポート

テーマ：里地里山

参加者：19名。男女比はほぼ同じ。年齢は20代から60代以上とほぼ均等にばらけていた。この分野の専門性の高い参加者は少なく、異業種での専門家（主婦含め）が多いと思われる。

＊里地・里山とは河川、奥山、海、人工林、市街地以外と考えている。特に人間の生活が強くかかわっている場所と考える。

取りまとめとしては課題ごとの意見交換の記録とした方がよいが、いざ始めてみると共通項の多い課題（赤太文字）が多く、行きつ戻りつしながら各自の提出した項目（黒太文字）がかなりの部分で重なり合うので、取りまとめとしては大まかなカテゴライズを行い、それに対応した意見交換を記入することとした。

補足として青文字でテーブルコーディネイトによる簡単な補足を入れてある。

休耕地や人が手を入れなくなった土地が増えているという課題。

増えると困るし、悲しい。

→オーナー制を取り入れてみてはどうか（都会の人、地域の住人）

→学校で、食農教育、農業体験に利用してはどうか。

水田周りの生物多様性は、人の生活があってこそ守られていく。

→これからの中山間地をどうするかという課題につながる。

→（農村）都会からみると、豊かな自然が残っている。

→Iターン、Uターンをしてもらうために価値を伝える。

＊多くの場面で現実経済や制度的な問題と同時に心の問題が見えていたことは注目すべきことと考える。

高齢化社会という課題。減ってしまった人口の逆戻りは難しい。

→人間の活動のある場所、ない場所を含めた地域全体の保護が必要なのは。人間の活動地域とそれ以外を分けて考えることも必要ではないか。たとえばそれは「サンクチュアリ」という方法もあるだろう。

＊多くの課題にまたがるテーマでもある。実際に今回のグループワークの多くの場面で高齢化・人口減少は取り上げられた。

山の竹が放置されている。自分の山でも、男手がないので切れない。

（女性だと2、3本が限界）高齢化の問題もある。手伝ってもらえるようなシステムがほしい。

手伝ってもらった代わりに、たけのこを獲り放題だとか、竹を持ち帰ってもらってもいい。

→物々交換というヒント

→竹は食物、加工品にして売ることができる。

→人と人のとのつながり、ネットワークこそが解決策となるのではないだろうか。

→善意、経済でなりたつ

→お金にならない

*一言「経済」という言葉で表すことは危険であるが、これもまた多くの場面で表現を変えて頻繁に出てきた。

湿った田んぼ には湿地性の植物が生息し、素掘りの水路 にはホタル、水生動物がいる。

→農地整備の面で許されない。

→昔ながらの農業を守れていればよかった。

→田んぼ、農地にはたくさんの生き物がいること知ってもらいたい。しかし、身近な生物（ミジンコ等）ではシンボルマークにはならない・・・。

就農したくても土地を借りることができない。

→これは制度の問題なのだろうか、経済の問題なのか。

*農地に関する課題も同様で、林地や里地全体まで拡大解釈するとかなりの頻度で出てくる。

環境的な付加価値の有無による、評価の明確化をしては。

→税金で保全していくしかないのでは。例えば水田環境税のようなシステムをつくる。

地域から人が出てゆくという課題

小さいころ地元にも、大人になると出ていく。帰ってきた時に気づくよさがある。帰りたいが、地元には仕事がない。

→雇用の確保、地元経済の活性化が必要

→生物多様性という言葉は行政等は使いたがらない。もっと強くだしていくべき。

→一般の人には生物多様性という言葉はわかりづらい、あえて出さない。

→県（行政）にはもっときちんと正確に。一般の方には優しく伝える

里地里山の人が生活できるような支援が必要。

→地域に住んでいる人の生活にとって里地里山が必要であるという裏付けが必要ではないか。

地域特性を打ち出す

→他県の事例だが、水田まわりの道や水路の整備について行政と農家でディスカッションをした。

→農家の所得についてきちんと考えるべき。

*経済と高齢化までは想像できるが、そこに心の問題という非常に表現しにくい課題が見えていた。

里地・里山と教育

最近子どもが外で遊ばない。管理された公園とはちがう、自分が小さい時に遊んでいたような場所で、体や頭を使うことが必要。

→子どもの時にこそ感性が養われる。

地域とのつながり、隣近所とのつながりが失われているので、子供の外遊びができないのでは。

高齢化で子供が少ない。地域全体での子供の遊び場、遊びに対する考慮が必要。

→子どもがたくさん集まれば、昔のような遊び方もできる。

→子どもが積極的に外で遊べるような仕組みづくりが必要。

→ザリガニ釣り（田んぼの遊び）ができる、田んぼ公園みたいなものを作っては。

→地域から学校へ 学校教育の中で行うことではないか。

→空き地（遊ぶ場所）は減ったか？そうでもないと思う。生きものを見ようとするセンスを養う。よく見れば生きものはいる。遊ぼうとすれば遊べる。

→生きもののいない田んぼはない

市内の緑の豊かな地域、田んぼで、子供たちが遊べる場所づくりが必要。

自分たちで田んぼを耕し、米を作って、米を炊いて、給食の時間に食べる。南国の事例もある。

→自分たちで野菜を作れば、野菜を作るのに6ヶ月は掛かることがわかる。野菜を作ることの大変さや、大切さを知ることができる。

→直接経験することが大切

→子供は本気で遊ぶ。自分が子供の頃は畑のものは柿をとって食べていた。

地域の伝統、習慣は失われつつある。

→グローバリゼーションの影響もある

→都会の子供を小さいころから田舎に呼ぶ。（疎開と言っていたが、こういう意味だと思う）例えば、（泳ぐのには）早い時期に川に入る。皮膚感覚で学ぶ。

→大人を呼んで、田植えの体験をやる時、田靴を履いていたが、裸足でやってみると、子どもの頃の感覚がよみがえってくる。

→管理職世代つまりは50代以降は蘇ることもあるが、30代40代になるとそれがない。ここに断絶があるのでは。

→次世代、ここに伝えていかなければならない。

→団塊の世代から断絶が激しいのではないか。

→30代、5歳くらいの子がいる親がターゲットとなるだろう。

→先生では無理。学校に入る前からやらないと。

→今の男の子が昆虫は嫌いという

→20代はまだ間に合う。

→観察会が物足りない。お年寄りも触るところか食べていた。皮膚感覚ではなく味覚も必要ではないか。

→ある保育園で、高さが1mある竹馬や板越えをやる。→市の方針

→ある小学校では一輪車に四年生の時点でみんな乗れないとだめ。だから一年生から練習

をする。

→保育園は上から下へ教えあいがある。小学校は友達同士で教えあい。(横のつながりが強まる)

→運動会の競技に縄ない競争がある。縄ないは体験教室でおじいちゃんに教えてもらう

山は私有地が多く、手入れされていない。子ども達が安心して遊べる山があればいいと思う。

→自分が子どものときは、山のレンゲやイチゴをなんとなく食べていた。

→食べられない(まずい)もの食べるような、苦い経験、体験も必要なのではないか。

→本当に有毒な食べ物は飲みこめない。

→生物の価値観をもった子供を育てる。

→生き物を食べるプログラムは心に変化をもたらす。

→幼児教育についてであるが、子どもが森にいて食べ物をとって食べる経験をする。次は食べ物をつくって食べる。

ふれあいは、生き物の命の愛しさを知ることができる。

→カマキリの卵をある幼稚園で育ててもらった。卵からカマキリが生まれるが、エサがないため共食いをする。カマキリは生きたエサしか食べない。エサの確保が難しく、エサが足りない。

→森でしか生きていけないことを知り、森に返す。

***子供・教育・地域(人のつながり)この3つがこれほど多く議論されるとは想像していなかった。が、多くの参加者がこの課題について非常に熱心に議論に参加していた。**

獣害に関して

生態系サービスという言葉があるが、人が受けているのはサービスだけではない。

→ケガや病気をした、獣害を引き起こしている動物を保護することがある。しかし、放す場所に困っている。そういった動物を放野できる山(サンクチュアリ)がほしい。

→獣害という言葉は人間が勝手につけたもの。動物に罪はない。

→エサがないから里に動物が降りてきているとは限らない。山にあるものよりも、里で簡単に手に入るおいしいものを食べる。

→予防というアプローチ

→農家のほうも脇が甘いところがある。獣害にあっている田んぼと、そうじゃない田んぼの違い。

→人間が動物を引き付けている。

→バランスがよければ里地・里山は成り立つ。

→ピースがかけるとうまく回らない。

***獣害については時間切れという面もあり、議論を深めることができず残念である。人と生きものの関係性でこれは大きな課題となることは明白である。また立場により主張や考え方に違いがみられた。**

参考資料

参加者から出た課題出しの記録

*ポストイットに自由記入とした為、記録としてはいくつかの文字や表現に多少の補足を行っている。

また参加者によって課題の記入数に差があるが、そのまま記録している。

- ・里地里山への期待として、子供たちが遊べる場所。たとえば里山を利用できる、公園や人工的な場所ではなく自然なところ。
- ・里山在住であるが、子供が外で遊ばない。感性を育てる為にはもっと活用してほしい。柵ある公園ではなく自然の中で遊べたらよい。
- ・人のつながりが減り、高齢化してゆく現在地域の一部を抜き出して考えるのではなく、社会全体を考える必要がある。
- ・子供がたくさんいれば違う動きができるかもしれないが、現状では大人たちが積極的に動かないといけない。
- ・小学校と連携してザリガニ釣りを始めた。そうすると周囲の人が管理を始めた。
- ・生きものはどこにでもいるはず。田んぼや学校、道端にでも。
- ・学校で食べるお米は南国市のように自分たちでつくる。パンはやめよう。
- ・外へ出てゆくことや人が多い。たまに帰るといいところと思うが仕事がない。
- ・子供たちに食べ物を通して食べることや命のことを考えさせたい。
- ・里地の農地整備
- ・メンテナンスフリーの営農地化
- ・里地生物の減少
- ・湿った田んぼ、農地整備つまりは三面張り、素掘りの水路は自然にはいいが生産性が低い。昔ながらの農法を守ればよいのだが・・・。
- ・生きものを盛り込むことでお金にできないか。
- ・いつも身近にいる生きものの方が大切
- ・就農したくても農地が借りられない。
- ・税金でやるしかない。
- ・身近な野生動物のサンクチュアリがほしい。
- ・本州から嫁いできた意見として、野生動物がもっと身近にいてもいいのでは。
- ・人の手が加わることで多様性が守られてきた。これは必要なことであり、今まで重要性を認識してなかった。
- ・人工林もきちんと手入れしてゆくべき。
- ・里地里山は人が守り、人とは関係ない動物も守ってきた。だから中山間地の活性化が必

要。

- ・大豊の学校では教育として地域とかかわることが多かった。
 - ・農家の人とのつながり。
 - ・景観維持はそこに住んでいる人のおかげ
 - ・獣害は人が作ったこと。解決方法は予防なのか。
 - ・動物がなぜ里地に降りてくるのか。
 - ・生物多様性は個々人で目指すべき姿が異なる。共通の姿はめざせないのは？
 - ・経営農家側として環境負荷の有無による生産品の評価が明確にならないのか。
 - ・実際に就農したくとも土地を借りられない現況。
 - ・水田の周りの自然をどう守るか。
 - ・農地+αを農業で守る仕組みが必要。
 - ・ビジネス化すると地元上勝の山はゴミが捨てられている。
 - ・いどりのように自然をお金に換える。
 - ・道路を走ると狸やシカが出てくる。里山付近に降りてきている。食べ物を植えてはどうか。食べ物がいないからでは。
 - ・お金になる農業
 - ・RDB種移植保全は全員の気休め
 - ・豊かな自然の中で生きてきた人たちがいてこそこれからのことが考えられる。中山間をどう守るか。
 - ・貴重な植物群落を見つけた。(田んぼ周辺)全国的に珍しい。保全が難しい。今後の方法についてどうしたらいいか検討・ヒントを得たい。
 - ・休耕田を少しでも減らしたい。ここ数年ですごく増えた。荒れた感じが悲しい。
 - ・生き物の恵みと何度か聞いたが、生き物がくれるのは恵みばかりではない。
- 里山の管理は里山の人金が金にならないのをわかってやっている。金にしないともう持続できない。

以上